

松尾芭蕉読本
こども版

三重県

松尾芭蕉読本こども版 1644年

～子供俳句もひとひねり～

キッズサイト



松尾芭蕉読本
こども版



1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年

1691年

1694年

芭蕉 1才



伊賀上野地図

伊賀(いが)の国にうまれました。
おとうさんは松尾与左衛門(まつおよざえもん)で、無足人(むそくにん)という、一番(いちばん)階級(かいきゅう)の低(ひくい)い武士(ぶし)だったんだ。ぼくのちいさいころのなまえは金作(きんさく)だったんだ。きょうだいはおにいさんとおねえさんがひとりずつ、いもうとが3人いたんだよ。



～子供俳句もひとひねり～

キッズサイト



松尾芭蕉読本
こども版



1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年

1691年

1694年

芭蕉 13才



伊賀上野城



伊賀上野城名張藤堂家・当時の上流武家屋敷

小姓(こしょう)として藤堂新七郎家に仕(つか)えました。

13さいのときにおとうさんがなくなりました。このころ、伊賀の国で2ばんめにえらい藤堂新七郎(とうどうしんしちろう)というおさむらいさんの家に仕えることになったんだ。





1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年

1691年

1694年

芭蕉 19才

と こ つ ご も り	(は し や ゆ き も り)	「春 年 や 行 小 晦 日 」
----------------------------	-----------------------------------	---------------------------------------

はじめて、俳句(はいく)をつくりました。
げんざい知られているいちばん古い句だよ。
仕えていた藤堂良忠のえいぎょうもあって俳句を
はじめたと言われているんだ。良忠は京都にいた北村季吟(きたむらきぎん)の弟子(でし)になって俳句をまなんでいたんだ。

意味(いみ) 今日12月29日は立春なので今日の小晦日(29にちのこと)はまだ年内、春が来たといってよいのか、年がいったしまったといってよいのだろうか、まよってしまう。



松尾芭蕉読本こども版 1674年

～子供俳句をひとひねり～

キッズサイト



松尾芭蕉読本
こども版



1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

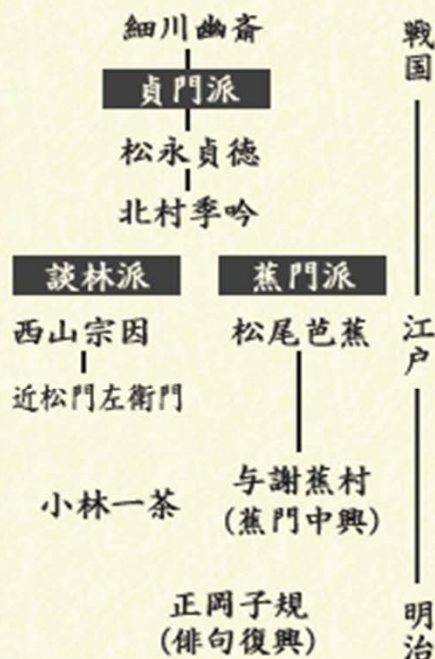
1687年

1689年

1691年

1694年

芭蕉31才



俳句の先生から『埋木(うもれぎ)』を伝授(でんじゅ)してもらいました。

主人の藤堂良忠が若くしてなくなりました。そのあと、(ぼくは)藤堂家から出て、京都の北村季吟せんせいの弟子になったんだ。

『埋木』というのは、(ぼくの)俳句のせんせいだった北村季吟せんせいの俳諧(はいかい)の秘伝(ひでん)で、卒業証書(そつぎょうしょ)のようなものなんだ。





1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年

1691年

1694年

芭蕉 38才



芭蕉の木

はじめて芭蕉(ばしょう)というなまえをつかいました。

ぼくは、この数年まえから江戸にでてきていたんだ。しばらくは他の俳人(はいじん・はいくをするひと)と技をきそいあったりしていたんだよ。

ぼくの弟子が芭蕉(バナナ)の木をプレゼントしてくれたんだ。そこから俳号を[芭蕉]ってつけたんだ。ぼくの家も芭蕉庵(ばしょうあん)ってよばれるようになったんだ。



～子供能くもひとひねり～

キッズサイト



松尾芭蕉読本
こども版



1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年

1691年

1694年



野ざらし紀行道のり地図



苔清水にて(風景写真)

『野ざらし紀行(のざらしきこう)』の旅(たび)にでました。

このまえの年におかあさんがなくなったんだ。『野ざらし紀行』の旅にでたのは、伊賀上野にかえっておかあさんのおはかまいりをする目的(もくてぎ)もあったっていわれているんだ。

『野ざらし紀行』というのは江戸から、伊賀上野、奈良・京都をまわって名古屋から甲斐(かい・いまでいう山梨県)をとおって江戸にかえるまでの9ヶ月かんの紀行文(きこうぶん)だよ。





1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年

1691年

1694年

芭蕉 43才

古池や
蛙飛こむ
水のをと

(ふるいけや
かわずとびこむ
みずのおと)



かえる

『蛙合(かわずあわせ)』というさくひんをつくり
ました。

芭蕉庵にぼくとぼくの弟子あわせて20人があ
つまってかえるを題材(だいざい)にした俳句
ばかりをよんだんだよ。そのときのさいしょの
俳句が「古池や 蛙飛こむ 水のをと」だったん
だよ。



1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年

1691年

1694年

芭蕉 44 才



笈の小文にかんする書籍



善光寺にて(更科紀行)

『笈の小文(おいのこぶみ)』・『更科紀行(さらしなきこう)』をかきました。

江戸から名古屋、伊勢、伊賀上野をへて奈良・吉野、大阪、須磨明石(いまの兵庫県)京都にはいったんだよ。ここまでの紀行文が『笈(おい)の小文』なんだ。そこから岐阜、名古屋をへて信州(しんしゅう)更科の月をみて善光寺(ぜんこうじ)におまいりをして江戸にかえりつくまでの紀行文が『更科紀行』なんだよ。





1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年

1691年

1694年



京都の風景写真

『嵯峨日記(さがにっき)』をかき、『猿蓑(さるみの)』を監修(かんしゅう)しました。
嵯峨(京都市)の落柿舎(らくししゃ)というところに4月18日から5月4日までたいざいしていたんだ。このときの日記が『嵯峨日記』だよ。
ぼくのよむ俳句は蕉風(しょうふう)ってよばれているんだよ。このとくちょうがいちばん良くでているのが弟子たちとつくれた『猿蓑』なんだ。





1644年

1656年

1662年

1674年

1681年

1684年

1686年

1687年

1689年


1691年

1694年

芭蕉 51才

旅に病んで
夢は枯野で
かへ廻るを

（た
めび
けはに
めかや
ぐれん
で
を）



51さいでなくなりました。
ほくがさいごによんだ句が「旅に病んで夢は
枯野をかけ廻る」だよ。ほくのおはかは大津
（おおつ）いまの滋賀県（しがけん）にある義
仲寺（ぎちゅうじ）にあるんだ。お葬式（おそう
しぎ）には弟子たちが300人もあつまったん
だって。



芭蕉の掛け軸と銅像

